
明日のススめ

ウラノス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日のススメ

【Nコード】

N5436D

【作者名】

ウラノス

【あらすじ】

出会いはビンタ。あなたは年上。いいことなくて、忙しくて、楽しいけれど繰り返し。そんな今日のサヨナラは、泣くほど愉快な明日だった。いつもを超えて、昨日を飛んで、ひたすら明るくまったりと。初めてだらけの大好きに、空飛ぶ心とホットコーヒー。好きだと言いたいこの時が、僕とあなたのラブ・コメディー！

く出会いのためのQ&Aく（前書き）

えー恋愛ものです。

まだ始まってないので・・・後書きで・・・

く出会いのためのQ&Aく

昼とは言えないけど、夕方とも言えないそんな時間の土曜の休み。

かつこいいとは言えないけど、かつこ悪いとも言えないそんな男が一人。

窓から差し込む日差しを浴びながら、ゆっくりと本を開く。

・・・昨日買った古本ですが。

そんなどこにでもある『今日』の真ん中で、最高に最悪な『明日』と出会った。

・・・少しずつフェードアウト。

BGMに乗りながら、タイトルコール・・・

【明日のススメ〜出会いのためのQ&A〜】

C a s t :

菖蒲 今日一

K Y O U I T I S H O B

苦

労人@お人好しメガネ

翌檜 小春

K O H A R U A S U N A R O

ビンタ@適齡期だヨ!

菖蒲 綾乃

A Y A N O S H O B

ブラ

コン@兄魂ですが?

竜胆 祭

M A T U R I R I N D O U

親友@ア、アニキ

雛菊 瑠璃

R U R I H I N A G I K U

親友@僕男なんだよ...

紫苑 辰巳

T A T U M I S I O N

マ

スター@たっちゃん

柏 由紀

Y U K I K A S I W A

後

輩@イマドキ華の元お水

STAFF:

ウラノス

URANOSU

作者@

がんばります！

「う
おい
」

「ん？
」

バ
シ
ン
ッ

始まりは、ビ
ン
タ
か
ら
で。

く 出会いのためのQ&A く (後書き)

えーわかったとは思いますが、登場人物にはそれぞれ花？の苗字を付けています。それぞれ花言葉にあわせてあるので、毎回紹介していきます！

Q1: 出会う前の準備って何がありますか？（前書き）

・・・・サブタイトルがまだ定まっていません

Qなのに？つけてないですし・・・たぶん変わるかもしれません。

Q1: 出会う前の準備って何がありますか？

彼女・・・翌檜 小春（25）の朝はいつもど通りの気だるい目覚めから始まった。

「ああ・・・気持ちわりい・・・頭いてえ・・・」

昨日しこたま飲んだ酒にクリーンヒット。人生何度目かもわからない二日酔いに苦しむ。

それでも無理やり体を起こす。今日は月曜日・・・英語で言うならマンデー。週明けのお仕事が始まる日だ。

グーグーグー

タイミングばつちりのところで携帯が鳴る。現在7:30。小春は毎朝目覚ましとの仁義なき戦いに競り勝ってきた。

いわく、何かに起こされるのが途方もなく嫌いなのだとか。まあ知ったこっちゃない。

体を引きづりながら顔を洗い歯を磨き食パンを生で食べながら新聞に目を通す。いつもの光景、なんだかおっさん。

食事が終わったら薄く化粧・・・ほとんど口紅（淡いピンク・一本のみ）だけをし、適当に選んだ服に腕を通す。

8:20。鍵を閉め、バス停へ。二日酔い現在進行中。ドアを閉める音に切れる。

8：36。バスが到着し、乗り込む。窓際確保！というよりこの席はほとんど彼女の指定席化。暗黙のルールだ。

9：00。会社に到着。

「おはようございまーす先輩！！」

「あああ！さけぶんじゃねえ！頭に響く！」

元気に彼女にあいさつするのは柏 由紀（23）。昔はお水の花道を躰進していたが、何を思ったのかOLに転向。そのままマイウェイを躰進する小春の後輩だ。

「ええゝ？もしかして二日酔いですかい？」

もちろん元・お水だけあってお酒に強い・・・というより二日酔いがない。

「もしかしなくてもそうだよ！」

首をかしげたままケラケラと笑う彼女が憎たらしくてしょうがない。ちきしょう！昨日一緒に飲んだつてのによ！・・・そう顔に書いたまままた歩き出す。

よく晴れた冬の空の真向からけんかを売るかのようなどす黒い雰囲気。バンバン出しながら。

由紀はそれを肌を感じながら・・・

「ぶっ・・・ぶぶぶっ・・・せんぱーい！すっごい不景気な中年サラリーマンみたいなオーラがにじみ出てますよ？ぶぶっ」

まわりのすっごい不景気な中年サラリーマン達がぬう・・・という顔をしているのにもまったく知らん振り。

そのまま小春をおって走り出す。

それはいつもどりの日常。あと五回繰り返す毎日。味気のない、ただくるくると回る繰り返し。少なくとも、小春にとっては・・・だが。

彼・・・菖蒲 今日一（18）の朝は遅い。

昔は4：00には起きて新聞配達バイトと朝食に弁当の準備。そ

れが終われば学校。学校が終わるとそのまま喫茶店でバイトをし、夜はこれまたさまざまなバイトをシフトと相談しながら掛け持ちしていた。

人は今日一のことを苦労人と呼ぶ。

それには理由があった。

今日一には両親がいない。彼が6歳の時に交通事故で死んでしまったからだ。

まあ両親ともギャンブルやら酒やらに没れこみ、子供の面倒をほとんど見ないようなような最低の人間だったのだが。

まあ借金がなかったのは、奇跡とも言えよう。

そんな両親の人となりのせい、まだ幼い今日一とその妹菖蒲 綾乃（16）を引き取ってくれる親戚もなく、そのまま施設に預けられることになる。

だがその預けられた施設というのが運の悪いことに経営不振に加えて虐待が問題になっており、結局今日一と綾乃は10歳の時に逃げ出てしまった。

それ以来、かつての両親の友人であるという人から部屋を借り、少しの援助を借りながらバイトと内職（兄がバイト、妹が内職）で生きてきた。

高校には私立高校に奨学で通り、授業料免除で通った。もちろん妹もだ。

このまま大学にもいかず、さあ就職でもするかな・・・というある冬の日に、苦勞して苦勞して苦勞してきた今日一に奇跡がやってくる。

なんと今日一の両親がたくさんの土地を持っていることが発覚したのだ。まあだからあの両親に借金がなかったわけだが。

親戚たちも今日一たちを引き取らなかった手前、今更所有権やらを持ち出せずにほぼすべてを引き継ぐことができたのだ！オオイエイ！！

まあ昔と変わって物価の上がったため、それだけで食べていけるわけではないのだが、以前に比べ今日一と綾乃の暮らしはずいぶん人並みに近づいた。

おかげで今日一は進学することができ、推薦入試で1月のうちに近くの某有名大学への進学を決定。そのまま高校生でもないが大学生でもない暮らしを送っていた。

コンコン

「おい綾乃ー学校に送れるぞー」

「う、ごめんお兄ちゃんっ！」

ドアを勢いよく開けて今にも転びそうなくらいの足の運びで飛び出してきたその少女は、天使のような顔を申し訳なさそうに歪めながらお兄ちゃんと呼んだ男に誤った。

真黒の髪をかわいくミディアムボブで切りそろえたかわいらしい彼女の名前は菖蒲 綾乃。

そして勢いよく開いたドアと衝突しそうになって慌ててよけようとしたものの、すんでのところで鼻にかすってしまったあと一歩が足りない感のある彼の名前は菖蒲 今日一。

二人は最初に暮らしたアパート（1Kトイレ・風呂共同）を15歳の時に出て、いまは某県某所にあるマンション（2LKトイレ・風呂別）に暮らしている。これで家賃が2万5千円というのは、今日一の働いている喫茶店のマスターのおかげだった。

つとそれより！

「・・・大変！遅刻！！」

「もお！なんですぐに準備しないの？」

「なんか説明的なものをしていたから・・・」

「誰が？僕は聞こえなかったけど・・・」

「ん？そう言えば誰？」

あ、私です

「ってそれより早く準備しないと！ほら、朝ごはんサンドイッチだからバスの中で食べな」

そういつて今日ーは弁当とは別に袋を渡した。

「ありがとーちゃんと食べるよ！」

そういつてニコツと笑う綾乃の笑顔は、まるで・・・ってなんかたとえるものがないくらい眩しかった。

「お兄ちゃん・・・行ってきますのちゅうは？」

「しません」

「・・・いつもしてくれるのにい」

「そういう誤解を招くようなことを言わないよ。ほらいつといで！ほんとに遅れちゃうよー！」

「わ！・・・やばい！っと！そういえばお兄ちゃん今日学校来る？」

「ああ・・・昼前ごろに顔は出しに行くよ」

「わかったー！じゃいつしよにご飯食べよ？」

「はいはい・・・それより早くいつといでー！」

「はーいいつてきまーす」

「いつてらっしゃい。気をつけるんだぞー」

こんな毎日。たくさんの苦労の上に成り立つ平穏で慌ただしいけど
ゆっくりとした今日。

こんな日がずっと続く。事件もなく、ゆっくりと歩く日々。それで
いいと思っていた。

それが今日だとおもっていた。

続く

Q1: 出会う前の準備って何がありますか？（後書き）

えゝまずは、今日ーと小春の由来から！

【曄菖蒲】

花言葉 優しい心 忍耐 貴方を信じます 優雅な心
アヤメ科 アヤメ属の多年草

別名 ジャパニーズ・アイリス

原産地 日本

花色 白 黄 オレンジ 紫 青と多色ある

開花 5月～7月

草丈 40cmから120cm

花持ち 1週間

凜とした姿から騎士の花と呼ばれています
これはけっこうハマってると思います。

【翌檜】

花言葉 不変の友情・不死・不滅・すこやか

ヒノキ科

別名 ヒバ

原産地 日本

葉 濃緑色で光沢があり裏面は白色の気孔線が目立つ
開花 常緑高木

樹高 20m

なんとなく明日とあすなろをかけてみました。

まあ不滅の愛か、友情か・・・

また曄菖蒲よりもはるかに大きい・・・そして曄菖蒲は騎士と呼ばれているというところにも注目してみました。

ではまた。

Q2: 出会いに実感が無い時ってどうすればいいんですか？ (前書き)

えーサブタイトルに苦しんでいます。

どうも！

Q2: 出会いに実感がない時ってどうすればいいんですか？

そんな毎日の繰り返しでも、週に二日の楽しみはある。

その日、小春は昼間っから飲んでいた。

理由は簡単。友人の結婚式だ。

まあすでに2次会なんだけど。

「ちくしょーっこれがぬおまずにいられるか！」

「ああん先輩！飲みすぎじゃないっすか？」

その友人は、小春の勤めている会社の同期であり、もちろん由紀も呼ばれている。

「どうおいつもくおいつも結婚だあ寿退社だあって・・・」

「あら？そこで嫉妬ですか？」

「ちげえ！別に誰が誰と結婚しようとか関係ねえ！私が結婚できないのがなんか嫌なんだ！」

・・・ごもつともパート2

「・・・結婚なんてあんまいいもんでもないっすよ？」

そう言うと由紀はつまみかけの枝豆で遊びながら、2杯目のチューー

ハイ（すでに生ジョッキ3杯、焼酎1杯）をくつと飲み干した。

「それでもだよー！」

今まで恋愛沙汰にはそこまで興味がなかったが、25にもなつてみれば、少しは意識をしてみよう。

「んゝその前に恋人作らないと！ですねえゝ」

「そりゃ私だつて付き合つたことぐらいあるさ」

昔・・・といつても高校時代、小春はたくさん告白されたうちの一人と試しに付き合つたことがあつた。

初めてのデートにドキドキしてみれば・・・そのあまりのつまらなさに、小春は驚愕したものだった。

前に友人たちとみた時は、あんなに面白かつた映画の続編も、（その・・・まあ一応）彼氏とみたらとんでもなく面白くなかつた。あえて言うならつまらなかつた。

そのあとビデオで借りて見たら、すごく面白かつた。

それから、なんとなく恋愛にたいして抵抗・・・というか、まあそれに近いものができてしまった。

以来ずっと恋をしてこなかつた。

それでも焦るものは焦る。もう25だ。いくら世間が晩婚化でも自分にとっては大問題だ。加えて親も最近うるさく言ってくるし・・・

「ああどうすりゃいいんだよお・・・」

そう言いながら芋焼酎をぐつと煽る。

それを見ながら由紀は、遊んだ枝豆を食べながらにやりと笑ってこ
う言った。

「まずは初体験からですなあゝはい」

たつぷり5秒間を置いて、小春は芋焼酎を嘔き出した。

いくら土地からお金が入るようになったと言っても、二人分・・・
しかも高校生の二人で食べていくには少しばかり足りない。

だから今日ーはまだバイトを続けていた。

今やっているバイトは喫茶店と、その時に合わせて少しのバイトを

入れている。

「ウィンナー・コーヒーとピザトースト・・・と牛丼特盛り」

「んゝカフェ・ラテと季節のパスタ！大盛りでね」

「かしこまりました・・・少し待ってね」

「わかったゝまってるゝ」

「つーかおまえらそんなに食うの？」

「おいおい・・・育ち盛りとは言わねえけど、それでもおれら高３だぞ？坊主が食わなすぎるだけだよ」

「そうかな？」

そつだよと言い残し、今日一が淹れたウィンナー・コーヒーを一口。

「こいつのなまえはゝ竜胆 祭１８さい」

「誰に説明してんだ？雛菊 瑠璃５歳」

「僕は１８歳だよゝ！！」

・・・ウィンナー・コーヒーを片手にピザトースト齧っている長め

の茶髪のイケメンの名前は竜胆 祭。

こう見えて陸上界では昇り龍と呼ばれ、ハイジャンの高校記録を持っているほどの男だ。

しかも喧嘩も強く面倒見もいい、今日一達にとっては兄貴的な存在。まあ外見がアレなのと喧嘩で学校じゃ浮いてしまっているが、本人にしてみれば本当に心を許せる親しい友人が何人かいればほかはどうでもいいらしい。

色んなバイトを紹介してもらったり、少し家を空けるときに綾乃に料理を教えてもらったりと、本当に今日一にとっては頭の上がらないやつだ。

その隣でカフェ・ラテのカップを両手で抱えてちびちびやってる小柄で金色の長い髪を後ろで結った・・・言いたくはないが女の子のように見えなくてもいい、というよりそれにしか見えないようなお・と・この名は雛菊 瑠璃（これまた女の子の名前）。

小さなころから絵が好きで、本格的に始めたのは高校の美術部に入ってから。

芸術の才能の塊のような奴で、漫画から油絵、水彩画など様々なジャンルに手を出している、いま世界で注目されている画家さんだ。

まあ性格においては前衛芸術のようなもんだが。

「説明終わった？」

もちよい

「さつさとすませろ？飯がはじまんねえ」

おK！

そんなふたりは、祭は陸上で、瑠璃は芸術で今日一と同じ大学の推薦を通っている。

まあ仲良し3人つてところだ。

「・・・ちよつとまった。私を忘れてる」

あと綾乃とも親交が深い。まあ綾乃はブラコンなのだが。

「いらつしやい綾乃」

「よお綾乃。なんだ？土曜課外か？」

「うん。・・・大変だよ」

「はっはっは普通科の僕とスポーツ科のマツリには分らない苦労ってやつだね」

四人はいつもいっしょにいる。それがデフォルトと化しているくらいだ。

「そうだねデフォルトだ」

「意味わかって言ってるのか？琉璃」

「っというよりみんな誰と話してんの？」

「「「さあ（ね）？」「」」

それから2時間、3人は今日のバイト先である喫茶店【都忘れ】で牛丼食べたりハンバーグ食べたり騒いだりさんざんしたあと、嵐のように去って行った。綾乃は渋っていたが、いられちゃ迷惑になりかねないので帰ってもらった。

というよりあいつらがたのんだ牛丼特盛りやらジュシーハンバーグやらは今日一がいるときだけに限った幼馴染メニューではない。

列記としたこの喫茶店都忘れの裏メニューなのだ。

そもそもこの喫茶店の店長は様々な料理を本場で極めた鋼の料理人で、さまざまなレストランでのバイトで料理を会得していった今日一とはレベルが違うお人なのだ。

まあその極めた先にまっていたのが喫茶店・・・というのかもしれないのだろうか。

ちなみに今日は八戸まで究極の魚介類を探しに行っているのだが。

手音の時計ではもう5:38を指していた。

「今日は店長もいないし・・・客もこないし・・・たたむかなあー」

つと、店のテーブルで古本を読み進める今日の耳に入ってきたのは店のドアの開くベルだった。

「ううゝ気持ちが悪いですゝ」

「ちよつとお！先輩！」

振り返った先にいたのは、顔を真っ青にしてもう一人に寄り掛かる黒髪の長い気の強そうな美人と、その美人に寄り掛かれる茶髪にウェーブのかかった可愛い感のある、やっぱり美人さんだった。

「あの一もう終わったんですけど？」

「ええゝこまります！店長さんは！？」

「いま食探しの旅IN八戸だそうです。帰りは明日ですよ」

「そんなあー」

「由紀・・・まあ・・・だめかも」

「ちょ、ちよつと！店の中ではやめてくださいよ！いまバケツ持てきますからね？」

そう言つてカウンター式の厨房に戻ろうとした今日一に、今気づきましたといった感じの気の強そうな美人・・・小春は、いきなり肩をつかんだ。

「うおい！」

「ん？」

バシンッ

「！？」

「てんめえ・・・しいつこいんだよ！こつちがあうよあつぱらいだからってえなあめんなよ？」

「先輩！この人はさっきのナンパやろうじゃないよ！！」

「あああん？ううううだめ・・・もうだめ・・・」

小春が発射5秒前の姿勢に入る。

「あああああああ！！ちよつとまって！！！！」

すかさず今日一が光の速さでバケツを持って来る。

まさに間　一髪！！すんでのところで間に合った様子。

「うつうつうつお」ピーーーーー

「ええ」

バケツに向かって発射している飲んだくれに一同人安心。

そのまま発車するだけ発射したら、口をゆすがせたあと速攻で眠ってしまった。

「どうもすみません・・・」

そのすいませんにはビンタと発射と勝手に居眠りの三つの意味が含まれていた。

「ああ大丈夫ですよ。間に合いましたし。それに店長のお知り合いの方でしたらいつまでいらっしゃられてもかまいませんし」

「いや、ビンタも・・・」

今日一のほっぺには、真っ赤な手形が残っていた。

「ああ・・・慣れてますから」

「えっ？」

「いや、酔っ払いの相手をするのが。ですよ」

「ああ！そうですね」

はっはっはと笑いあう二人。隣でうーうーうめきながら爆睡する一人。

結構シニールだ。

「バイトか何か？」

「はい。昼から夜までここでバイトしてます」

「へえ〜！大学何年？」

「いえ、今年から。ですね」

「ふーん！がんばってね」

「はい・・・あ、なにかお飲みになりますか？」

「ん〜じゃキャラメルマキアートお願いできる？あとそこまでかしこまった敬語使われても困るから・・・普通にいいですよ？」

「はあ・・・わかりました。キャラメルマキアートと普通で。ですね」

にこつとして言う今日一に由紀は一瞬キョトンとしたが、すぐにけらけら笑いながらお願いします。と返した。

それから1時間、今日一と由紀は談笑していた。

「へえ〜キョウくんはまだ18なんだ〜」

ちなみに今日くんとは、由紀が

「今日一っていうの？ならキヨウ君でいいかな？」

と勝手にきめちゃったあだ名だった。

「ええ。でも由紀さんもとても若く見えますよ？」

「うまいねえキヨウ君は！」

「ん~~~~~」

ガバツと顔をあげた小春は、妙におなかが減っていた。

「・・・マスター！から揚げ定食にラーメン・・・」

「あ！先輩起きたんですか？」

「ううゝ少し酔いのこってるけどな」

「お作りしましょうか？」

ん？とぼあっとした顔をあげた小春と、カウンターから尋ねる今日の眼が合った。

それがファーストコンタクトだった。

まあ一方的に最悪だね。

続く

Q2: 出会いに実感がない時ってどうすればいいんですか? (後書き)

今回は、柏 由紀の由来です!

【柏】

花言葉 愛想のよさ、愛は永遠に、自由

植物 双子葉植物離弁花 落葉高木 ブナ科

学名 *Quercus dentata*

分布 北海道、本州、四国、九州

環境 丘陵地の森や林の中、山の森や林の中、公園や庭

花期 5～6月

結実期 10月

花の大きさ 10～15cm (雄花穂)

丈 10～15m

花言葉はぴったりですね。最初は重だっただんですけど・・・かえちやいました! すません!

Q3：気がついたら普通なことになっていた時の対応策はなんですか？（前書き

えートムヤムクンです。

作者はあまり好きっというわけではありませんが、友人宅で食わされました。

意外においしいんですね〜

Q3：気がついたら普通なことになっていた時の対応策はなんですか？

全てはあの日から始まった……

と、今思えば的な発言をしてみる。

あの後、由紀によって謝らされた小春は、今度お詫びをするということだから揚げ定食ライス大盛りとラーメンをぺろりとたいらげた。

ちなみにここ、喫茶店です。

まあ最近やつと手に入れた今日一の携帯に最初に入った女性のメアドが小春だったのは……ほら、ねえ？

その日、今日一は暇だった。

綾乃は試合で祭は大学の陸上の練習（入学が決まった時点で参加している）、瑠璃は絵の個展の初日で挨拶回り。

ここ都忘れの休日の昼下がりのお客さんと言えば、この三人のほかには常連さんが4、5人いるのだがそれすら来ない。もう1時間は客足が途絶えている。

「ああ……なんか暇だな……」

古本ももう読んでしまった。ちなみに『風と共に去りぬ（上下セットで1000円・渋い）』と綾乃から渡された甘いラブロマンス小説

だ。

前者の方は感動したし、まあ後者の方は・・・顔を真っ赤にしながら一気に読みました。

「いいねえ。こんな恋愛してみたくもないけどな」

どっちですか？

カランコロン

「いらっしゃいませー」

「おっ」

「あら」

入って来たのは冬物コートを小粋に着こなした、いかにも働く女バリバリの小春さんだった。

「カウンターとテーブルどっちになさいますか？」

「んー一人だしカウンターで」

「はい、ここにどうぞ」

すつと椅子を引く今日一。まあ暇だからこそ行えるサービスだ。

「えらく空いてるな？もしかして私ひとりか？」

「ええ。お一人になりますね」

「おおおなんか貸切つばいな！」

「クツ・・・」

年柄にもなく（まだ25！）子供つばい小春に、今日ーは吹きだしてしまった。

「なんだよ」

「いえ、知り合いが前に同じことを言っていましたので・・・」
言わずとわかる・・・瑠璃である

「すみません。ご注文は？」

「んゝカプチーノとトムヤムクン」

「ありません」

ああー裏メニューにもないもの頼んじやつたよ

「食いたいんだ」

「んゝ無理だと思いますが」

「どうしても食べたい！」

「ゝわかりました。少しお待ちください」

作れんのかよ！

「海老フライ用の奴と・・・今日の Pasta のマッシュルーム・・・えええ！な、なんでナンプラーがあるんだ??」

調味料庫（古今東西なんでもござれ）の奥にひっそりと、しかしガンガン異彩を放つナンプラー。

ついでにメモを見ると、『コーヒー研究には使えない』との文字が。

「使えるわけないよねー」

まあ助かった。さっそく調理へ。

トムヤムクンは2年前のタイ料理の店で習った本場流。というより今日一に作れない料理はほとんどないと言っても過言ではないのだ。

「先に、カプチーノをどうぞ」

「ああ・・・つつかえらく料理うまいのな？」

「まあ、バイトで鍛えましたから」

「（ズズツ）んー、んまい」

カプチーノの泡を口の周りにつけるといって、瑠璃ですらジョークでわざとやるような高難易度ウルトラCを平然とやってのけた、仕事はバリバリこなす適齢期の小春さん（25・女性）

「クツクツ」

「あんだよ！」

凄んでも口には茶色のフワフワなお髭。

まるで小さな子が母親にねだっているようにも見える彼女は、まあいいかと少し体を起こしてカウンターから鍋を覗いた。

「おっ！うまそうだな」

そんな小春がとても可愛らしく思えて（初対面はビンタ＆発射）、今日一は紙ナプキンで口髭を拭ってあげた。

「むっ・・・」

「ついていましたからね」

「謝謝」

なぜに中国語？というのは置いて、そうこうしているうちにトムヤムクン作りはいよいよ佳境に差し掛かってきた。

あとは隠し味のココナッツミルク（紅茶用）を入れて、ナンプラーで風味づけ。レモンを絞ってできあがりだ。

店いっぱい 에스ニックな香りが広がる。

「おまたせいたしました。トムヤムクンですよ」

「おお！いただきます」

黙々とトムヤムクンを啜る小春に、作った方の今日一はうれしくなった。

まあ今日一が隋所にどこしたひと工夫に気づくことは最後までなかったが。

「なんか殻なしの海老って安っぽく見えるよな」

・・・あなたが食べやすいようにわざわざだしを取った後剥いたんですよとは言えない。

時としてこういう時もあるのだ。

「ふーっ！うまかったー。ごっそさまでした」

「
ものの5分で熱々のトムヤムクンをたいらげてしまった。

「おそまつさまです」

そのまま皿を洗いだす今日一を、満足した顔で見る小春。

メガネから覗く優しそうな瞳に、不覚にも少しドキッとしてしまった。

「なんですか？」

ん？という顔でこっちを向かれても、困る小春はそっぽを向く。

「クスッまたついてますよ」

ほっぺの上についた赤いスープをこれまた紙ナプキンで拭う今日一。

「うつ・・・カ、カムサハムニダ」

なぜ韓国語！？

カラ・・・カランコローン

お口で登場由紀さんでーっす

「いらっしゃいませ」

「おいーーーーっす」

「おいっす」

「キョウくんも！おいーーーーっす」

「ぼ、僕もですか？」

「はい、おいーっす」

「おい・・・なんだよ由紀、この私の美貌に会いに来たのか？」・・・
・グスン」

「はい、実は先輩の顔を忘れてしまって・・・思い出すために見に来ました」

「なに？ ショックで忘れるほどの美貌だと？」

「はい。あまりのショックでアレルギーが起きました」

「ハッハッハッハ！ 腕をあげたなこの野郎！」

ガバツとヘッドロックをかける小春に

「ああー先輩のナイチチに顔が当たるーキャー」

と、ケラケラ笑いながらもがく由紀。

「ナイチチっていつのネタなんすか・・・」

「むうっ！ 私はまだ23です！」

小春にロックされながら睨まれてもね・・・

「ご注文は？」

「んーカフェ・ラテのエスプレッソ多めでー」

「かしこまりました。小春さんはおかわりどうしますか？」

「ああ・・・少し汗かいたからアイスティーのストレート」

「少しおまちください」

そう言って、コーヒーの豆をエスプレッソマシンにかけはじめる。
コーヒーの香りがまた店中にしみわたっていく。

「というか先輩、さっき何食べたんですか？」

「ああ、トムヤムクンだ」

「なんかアジアっぽい！」

「それっぽい範囲が大きいですね」

「というより先輩言っただけですか？」

「はい、カフェ・オレとアイステイアのストレートになります。」

「なんのことだ？」

アイステイアをチューツと飲みながら尋ねる小春

「お詫びのデザートのお誘い」

ブバツ

「うわぁぁっ」

「あらあら？顔射？」

「ゴホッゴホッ・・・そういうことを平然と言っな！」

「すいませーん」

顔面に紅茶を吹き付けられた今日ーさん。それでも冷静にタオルで拭って机を拭いてるあたりは、さすが場数を踏んでるだけのことはある

「デ、デートですか？」

「うん。デートデート！」

「誰と誰がだよ」

「そりゃ・・・」

カランコロン

「チャッラーーーーーー！瑠璃平でーーーーす！」

「綾乃君、十枚持つて行きなさい」

「祭師匠！もう座布団がありません！」

ああ・・・カオスに染まっていく・・・

続
く

Q3: 気がついたら普通なことになっていた時の対応策はなんですか？（後書き

それじゃあ今回は、竜胆です。

【竜胆】

花言葉 正義、さびしい愛情

科名 リンドウ科

属名 リンドウ属

園芸分類 多年草

原産地 日本

花期 8月～11月

用途 花壇、鉢植え

昔は漢方等に使われていたというきれいなお花。

花言葉的にはドンピシャですね。まあさびしいの意味も気になりますか・・・

次回は雛菊です お楽しみに！

Q4：大事なことはいつも最初に言った方がいいですか？（前書き）

世界シリーズだ！ドン！さらに倍！

テンションあげていかないと、なんだかマンネリ化（はやくね？）
しそうなので・・・

Q4：大事なことはいつも最初に言った方がいいですか？

あの子のことは、もう今日一の中では忘却の彼方（にしようと鋭意努力中）だ。

書いてやうと一話分位になっちゃうので割愛。機会があれば、また。

まあ大まかに言うと、嫉妬の鬼と化した某妹さんの瘴気に当てられて某江戸っ子OLさんが対抗。喫茶『都忘れ』は一時冷戦下のミサイル警報の出たアメリカ軍基地のような空気になってしまった。

あとは瑠璃の実は男の子です発言と妙に幼馴染”Sと仲良くなった由紀さんなど・・・である。

「あれは大変だった・・・って！また思い出しちゃったし！」

あ、ごめん

まだまだ寒さが胡坐をかきながらお茶を啜っているような、そんな冬の平日の午前10時。

喫茶『都忘れ』はいつにもまして静かだった。というより客足が途絶えていた。

そもそもが、ここ都忘れは商店街【阿頼耶坂】あらいやかから一本脇に入った、いわゆる裏道という場所にあり、若干常連客中心の隠れた名店のよな感じなのだ。

だから必然的に平日のランチタイムや休日の午前から昼過ぎ以外は
お客が少なくなってしまう。

そんな、いつもの風景。

「・・・グスッいい話だねえ」

じゃないんだなあ」

お店の中で一番日当たりのいい席を陣取って感動に浸っているのは

小春だった。

「ティッシュの使いすぎは勘弁してくださいね。はい、カプチーノでよろしかったですか？」

「ズズツ・・・ああ、ありがとう。この本、由紀の奴に勧められたんだけどさ。泣けるんだよね・・・グスツ」

彼女が読んでいるのは、絵本の【百万回生きたねこ】だった。

いや、たしかに泣けるいい話だけどさ、二十過ぎた後輩が先輩に勧める本か？そこはかとなく子供扱いしてね？

「ああ、その本僕も感動しました。妹に読んでるうちに、僕まではまっっちゃって」

二人の間には、ほんのちよっぴりのセンチメンタルがあつた。

「・・・というより、お仕事は？」

流れる空気を一気に切り捨て、尋ねる。多かれ少なかれ由紀の真意

(子供扱い)に

今日一も感じていたのだ。

「ああ、この一週間会社にこもってたんだよ。だからその分の休みをな。まあ徹夜明けの朝からなんだけど。でもおまえだってなんでこんな時間にいるんだ？学校じゃねーのか？」

本をおいてミルクティーをすすりながら尋ねる。

「僕は今日は学校がありませんから。入試は終わりましたし」

「ふーん」

さして興味はなかったらしい。少しの沈黙が間を挟んだ。

「なんか腹減ったなー」

あらかさまな棒読みで宣言する小春。

彼女だって空気を読むのだ

「なんにします？」

まあトムヤムクンを作れたんだからなーと、今日ーは考えていた。そう、この時までには・・・

「じゃあナシゴレン」

「無理です」

「トム作れたなら作れんだろ？」

トムって・・・なんか人みたい

「ナシゴレンって・・・」

「食いたーい」

「中華鍋があるんだよなー。ああ・・・もう作りますよ」

少しのため息、冷蔵庫のなかを搜索開始。

見つけたシーフードミックス（海の Pasta 用）を炒めながら卵を溶き入れる。

「ナシゴレンって、なんだ？」

「え？知らずに注文したんですか？」

「なんかアジアなのは聞いた気がするんだけど」

「・・・インドネシアの、まあ焼き飯みたいなものです」

「ああ、インドネシアなら行ったことあるぞ！出張で、だけど」

そついう話をしながらも、やっぱり手はせわしなく動く。

「そついえば、インドネシアといえばジャワティーありましたね。お出ししましょうか？」

「ああ、お願いするぞえ！」

ちなみに、裏メニュー料理は時価である。この前のトムヤムクンは450円。ナンプラーは喫茶店には必要ないのだ。

手慣れた手つきで紅茶を入れる。

「ホットでいいですよね？」

「おk」

「どのようにお飲みになりますか？ミルクとストレートがおすすめです」

「もちろんミルク！」

なにがもちろんのかは、このさい置いときました。

中華鍋にご飯を入れ、その隣でポットとカップを温める。

オタマでかき回しながら、やかんの熱湯を茶葉を入れたポットに注ぎ込む。

そのまま紅茶を蒸らしながらナシゴレンの仕上げに入る。

味を調えた後皿に盛り、半熟の目玉焼きを盛りつけ蒸らし終わった紅茶をカップに注ぎ・・・

フウ。

そのまま冷たい（こだわり1）ミルクを少なめに（こだわり2）そそぐ。

ちなみに紅茶を濃い目に淹れるのがこだわり3だ。

「はい、ミルクティーのジャワとナシゴレンになります」

両方とも熱々の状態で。

「いっただつきまつす」

まずはナシゴレンをかきこみだす小春。

んゝワイルド

「んめえ！おまえよくこんなマニアックな作れんな？すごいぞ！」

「前にバイトで作ったことあるんでね」

ガツガツガツガツガツガツガツガツ

「んまかった！」

ほんとに・・・なんというか、キレイに食べきる小春。

少しさめた細部にまでこだわりぬいた紅茶をズイッと飲みほしおきまりのプハー。

「じっそさん」

「どうもー」

「その、あのな」

「ん？なんですか？」

ムムムツという顔を作り、皿を洗う今日一を睨みつけるように見てくる小春。

「あ、明日定休日なんだろう！」

「ああ、すいませんね。店長が今度は松坂牛の踊り食いとかでまた旅に出ちゃったので」

ここ都忘れは、あまりに定休日が不規則だ。

というか、もうもはや定休日じゃない。

「いや、そうじゃなくてだな・・・」

「？」

「ゆ、由紀の奴がな、その・・・おまえを、でーとに・・・」
顔を真っ赤にしながらどもる小春。

さあ、言うんだ！言っちゃうんだ！

「あ、黄身ついてますよ」

グイッと紙ナプキンで口元をぬぐう今日一。

「あ、う、 Danke」

今度はドイツ語だい！

「・・・また言えなかった・・・」

「？」

「つつか、なんで誘おうとしてんだ？あたし」

そこから？

つつく

Q4：大事なことはいつも最初に言った方がいいですか？（後書き）

ついに今回は、雛菊です！

【雛菊】

花言葉 無邪気、希望、無意識、平和、明朗

別名 デイジー、延命菊、長命菊

科名 キク科

属名 ベニス属

原産 ヨーロッパ

花期 初春～秋

園芸分類 多年草

いい選択だと私は思っております！

祭、瑠璃、由紀、小春の全員にきちんと昨日（過去）を用意していますので、そこら辺を出せたらな～と思います。

新しいキャラクターはもうすぐ出したいと思います。

話に合わせて、結構重要？なものもでてくるかもしれません。なにぶん初心者なものでこういうところが今一つかめなくて・・・。

必死こいて考え中なので、お楽しみに！

Q5:もしもの時って誰かに頼っちゃいけませんよね？(前書き)

えー。

なんというか、次回への布石？みたいな物かもしれません。

Q5：もしもの時って誰かに頼っちゃいけませんよね？

「え？なんでデートに誘うか？ですか？」

いつもの飲み屋【はなしのぶ】にて。現在午後8：30。

「うん」

「そこに男がいるからでしょう！」

「……」

「そ、そんな睨まなくったっていいじゃないっすかー」

「で？」

「というかいきなりビンタかましてんだからそりやお詫びのスリーセブンフィバーっしょ？」

「やっぱそーなの？」

「んゝせつかく知り合いになったんすよ？キョウ君すっごくいい人っばいじゃない？」

「まあたしかにいい人っばいな。とかいい人だし。頭いいし。料理うまいし。しっかりしてるし。お人好しだし。んゝ」

「つーか先輩それって……」

「ん？」

「いやあ。誘うべきだなあと」

「そうなんだよなあ」

それから小春は悶々としていた。

デートに誘えない。誘えない誘えない。

それからなぜか恥ずかしくてメールも打てなくなった。

悶々悶々悶々モン・・・

「だあああああつ！当たって砕けるだ！」

でも砕け散っても元に戻るほど若くはない。

25歳。精神的にも社会的にもそこそこ立場や面子が出来上がってきてしまう年齢ではあるが、なんとなくまだまだマッスグな恋に夢を見てしまうある意味で【脂の乗って来た】時期なのかもしれない。

まあそんなことは置いといて。

「くっそー！恋だのなんだのしたこたねーからデートになんて誘えねえ！」

そして再び悶々悶々。ベットに寝ころび顔をつずめて悶々・・・

誘うなら今日だ。今は10:20分。まだ迷惑には当たらない時間なのは、社会人の常識的なものなのかもしれないが。

f r o m : 翌檜小春

t o : 菖蒲今日一

件名 : 小春だ

明日、この前のお詫びがしたい。9時に駅前集合。

「・・・味気ないかな？でも顔文字なんて使ったことないし。電話なんて不可能だし」

んゝここは悩むぞ。

送信のボタンを押しかけながら、再び思索する。

f r o m : 翌檜小春

t o : 菖蒲今日一

件名：小春です

このまえのお詫びにデートしない？

返信なるべく早くオネガイね？

「んゝ・・・軽すぎるかな？でも絵文字は使ってないし・・・」

f r o m : 翌檜小春

t o : 菖蒲今日一

件名：小春

先日は大失態してしまい、ご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。

そのお詫びと言っては、かえってご迷惑になるかもしれませんが、ご一緒にお食事など行っではもらえませんか？

お返事、お暇があるときでよろしいので、お待ちしております。

「先輩！お先しましたー」

「ん？ああ・・・」

「ありいなんですか？メール？めずらし！先輩がメールなんて何年ぶりっすか？」

「おまえこんなにピチピチ女子高生捕まえて何言ってやがる？メールが本業みたいなもんよ？職業、メールよ？」

「あらまあ！こんなに老けた娘いたかしら！あなた、三十代ですか？って言われない？」

「よくみるこのハリのある肌を！節穴なんじゃねえか？」

「えー、おばちゃんにはハリを刺しても元に戻りそうにないシワしか見えなーい」

「てんめえ！」

「きゃー！」

プロレス開始・・・20分後

「ふう、ふう、とにかく、思春期ど真ん中ホームラン、やりました男・新井本シーズン初ホームランの女子中学生じゃないんだから！」

「はあ、はあ、でもなあ・・・」

「ああもう！ポチつとな」

送信ボタンをピッ（ポチ？）っと押しちゃった由紀・23歳。

「おえっええ？お、おま、おまおま！」

「だあい丈夫ですよ先輩！さっきの文面ならバッチシダって！」

恐る恐る、まさか・・・いや、でも・・・っと携帯をチラ見すると、

送信完了・三件

「だあああああああああああああああああああああ」

「せ、先輩？どうしたんですか・・・ちょ！グーは、いやパーもだめ・・・ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああつあああああああつあああああああああああああああああああああ」

この夜、最近と言ってもすでに築6年のマンション【阿頼耶ルピナ

ス2号館】に、二つの奇声が木霊したのは、ヤマビコさんではなく、マネッコさんでもなく、702号室の二人からだった。

続く

俺ってポールなのかな？

ま、いつか。

でも苗字が……んー

続く

Q5：もしもの時って誰かに頼っちゃいけませんよね？（後書き）

今回は、なななんと！今日ーたちが使用する建物の紹介です！少し多いので何科かと花言葉とかんたんな紹介だけで・・・。

【都忘れ】

キク科・日本原産・濃紫・淡紫・紅・白

花言葉 憩い

喫茶店

今日ーがバイトするこの話の中心。たまり場とも言っ

【はなしのぶ】

ハナシノブ科・ヨーロッパ原産・紫

花言葉 来てください

飲み屋（居酒屋）

小春と由紀の行きつけ。ここのマスターは由紀びいき

【ルピナス】

マメ科・地中海沿岸、北アメリカ原産・白

花言葉 （白のみ）常に幸福

マンション 阿頼耶ルピナス二号館

小春の住むマンション。2LK。七階建て。築6年

【ゼラニウム】

フロロソウ科・南アフリカ原産・白・桃・緋紅色・橙・紅紫・紫

花言葉 決心、君ありて幸福、真実の愛情

小中高大一貫校 私立ゼラニウム学園高等部

今日一達の通う学校。4年前に開校。部活が多い。行事も多い。だから人気も馬鹿みたいに高い。

QQ...ふじや〜今日が終わるんですよね？（前書き）

第一章・完

まだ早かったっすね。すんません。

Q6…よつやく今日が終わるんですよね？

「あ、メール」

「お兄ちゃん！次お兄ちゃんの番だよ！」

「んーちよつとまってるね。・・・三件も・・・あれ？全部小春さん？」

「もうー先すすめとくよーキョウ？」

「おいおい瑠璃、飛ばしちゃったら楽しくないだろ？」

「えーだったら一回休みだ！」

「勝手にルールを増やすなよ？まってやるうじゃないの？ククッ」

「だーね。けっこうー大事？」

「何の話？ねえなんの話？ワタシワカンナイ」

ソワッ

「明日か・・・定休日だし、大丈夫だね。」

「殺す！お前をここで殺す！」

ビシッ

「殺される前に殺す！」

ドスッ

「殺される前の前に殺す！」

バスッ

「殺される前の前の前に殺す！」

グワシッ

拳と拳が飛び交う中、確かに二人は時の流れを感じた。

無意味すぎる感。戦場と化すマンション。一人の戦士は己のために。もう一人の戦士も・・・やっぱり自分のために。

「ハア・・・ハア・・・どうやら万策尽きたようだなあ由紀い？」

「ならここで・・・決めるああああ！」

ピンピロピロピン

着信一件有り。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

ズサアアアアアアアアアアアッ

ヘッドスライディングでビーチフラッグ。ギリギリの勝負を制したのは・・・・YUKI-KASIIWA！

「えええ？そこ私じゃね？むしろ私じゃね？」

「んー私も今そう思います。ハイ」

結局小春に戻される携帯。無意味ここに極まれりなどと。

「えーっと・・・・」

f r o m : 菖蒲今日ー

t o : 翌檜小春

件名：R e : 小春

いいつすよ。お弁当作っていきますから、入れてほしいものがあつたら教えてくださいなー。

「きゃあきゃあ！なにこのかわいいメール！先輩！なにたべたいんでちゅか？」

「ん！返信の内容なんにすつかな」

「おおスルーかよ」

from：翌檜小春

to：菖蒲今日一

件名：Re2：小春

甘く焼いた卵焼きと唐揚げ！

「ああ・・・末期だ」

「あ、祭！僕飛ばしちゃっていいよー」

「ん？なんかすんのか？」

「明日の準備？」

「なんだ？弁当かい？まあでもキヨウのお弁当はポイント高いよね」

「はっはーん。了解だ。なんか俺も手伝うぜ？」

「いいよ別に。大したことないし」

「ばーろっ！俺の大事な坊主の初めての異性間交友なんだぞ？祝わなくてどうする？なあ瑠璃！」

「そっだよ！やっぱ女の子はイイモンダズエ？」

「ああ。まったくだズエ！」

「いや、おまえらが言うとなんか別のものに聞こえる」

「お兄ちゃんがデ、デ、デートウ！？」

「あ、綾乃忘れてたね」

「アノオンナね。アノオンナなのネ」

ズゴゴゴゴゴ

「ドロボウネコドロボウネコドロボウネコドロボウネコ……」

一気に部屋が氷点下を振り切った【ほっきょくのせかい】へと化する。

「あゝ綾乃？俺ら映画のチケット持ってんだよ。なあ？瑠璃？」

「そ〜そ〜！ちょうど明日公開なんだ〜！！一緒に見に行こうよ？」

「ドロボウネコドロボウネコドロボウネコ・・・」

「綾乃。ひさしぶりに映画見てきたら？」

「ドロ・・・へ？映画？」

「最近行ってなかったろ？ラブコメ映画だしさ」

「そうだぜ綾乃！お兄ちゃんもこう言ってるんだし」

「もしかして〜お兄ちゃんに逆らうのかな？」

黒いぞ瑠璃。

「ぐっ・・・わかった！映画に行くわよ！」

「綾乃の分のお弁当も作るよ。なにが食べたい？」

「甘く焼いた卵焼きとから揚げ！」

「了解〜」

「瑠璃じゃないって！」

それから一時間、綾乃の瘡気に当てられ続けた瑠璃と祭は・・・激しい腹痛と幻覚に襲われたのは・・・また別の話。

「つーか弁当作りすぎたか？まあいつか。祭たちが食うだろうし・
・いや、小春さんが食いそうな気がするな」

朝も6時からせつせと弁当作りに励む今日一。

4つ並べたお弁当・・・・ってほとんど重箱やん！と、自分用のお弁当（それでも一般男子高校生サイズ）を手に持ったまま、おにぎりとおかずを詰めていく。

「僕が食べなさ過ぎんのかな？」

いいえ、他が食べすぎなんです。

「オハヨウ！マイスイートボーイキョウ」

「気持ち悪いからやめろ」

「ちなみに俺と瑠璃はここ菖蒲家に泊まったのだ！もちろんキョウと同じ布団で・・・」

「たのむからそこで顔を赤らめないで・・・」

顔がずば抜けていい分、そっちの方向にも十分に対応してそんな雰囲気を持つ祭。いやーん

「まあとにかく、今日は特にはやいな。最近はまだ俺が起こさないと起きなくなってるのに・・・しかもキッスで」

あることないことーあることないことー

「つーか最初からねーよ!」

「キョウを朝からからかったことだし、朝飯でも作るかな?」

弁当を作ったにしては片付いてるキッチン（家事レベルも高い今日ー・18歳）に男二人。

「・・・はあ。たのむ。」

「何が食いたい?」

「純和食しか作れないんだから、メニュー聞かれても答えようがないよ」

「でもお前みたいに全世界の物作れるやつもあんまいないと思うぞ?俺は」

「まあ、バイト歴長いからな。でも祭だって和食はバイトで覚えただんだけ?」

「一緒に住んなよ・・・自分で覚えたんだ」

「初耳!いまの初耳!」

「初めて言っただよ」

苦労人の今日ーは、いつもどこかで大人の自分を作っている。

今まで学校で友達と戯れるよりも、大人に囲まれた社会の中で長く生きてきたためなのかもしれないし、養うことを誰よりも早く始めているからかもしれない。

でも祭と、瑠璃と、綾乃といるときは年相応の態度を垣間見せる、素の菖蒲今日一になる。

優しくて、おっちょこちょいで、バイトと家事がもはや趣味の、皮肉屋で少し歪んだ高校3年生。

それがキョウなのだと、祭はこのとき思っていた。

大人なのは、祭りの方かもしれない。

二人のいるキッチンにも、少しずつ朝焼けが入り込む。今日という日の始まり。

デートの始まり。

第一章【出会いのためのQ&A】おしまい

Q6…よつやく今日が終わるんですよね？（後書き）

えーっと、あらためて、完！

次は一応デート〜新キャラまでと考えております。

今回、なにも紹介するものがない！と思い、焦り気味でございます。

そ・こ・で！

超・番外閑話休題！

友情戦士マツリックス

の予告でも・・・

私立ゼラニウム学園は平和な学園だった。

温かいお日さまの下、今日も健やかに眠る祭は、生物室の異変に気付く。

熱いハートと部活動と、奇跡の技術が交錯したとき、君は新たな戦士をその眼で見る。

第一話『ナマモノ、アラワル』

ちなみに、少し前（土地の所有に気づいてすぐ）の話になっています。

お楽しみにん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5436d/>

明日のススメ

2010年10月12日01時39分発行